
ある日の帝丹小学校

リコラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の帝丹小学校

【Nコード】

N0176E

【作者名】

リコラ

【あらすじ】

ある日突然、帝丹小学校に一日校長がやって来た?! 最早常識を打ち破ってまで繰り広げられる、青春の汗にまみれまくったある少年達と教師の物語を、あなたも覗いてみませんか? ※キャラ壊れ多々アリです。予めご了承下さい。

0 時間目・プロローグ

オレは江戸川コナン、探偵だ。

現在、帝丹小学校一年B組に籍を置いている。

…本当なら、普通の楽しい高校生ライフを送っていた筈なのによ…
ん？

小学校ライフはどうかって？

そりゃ楽しいけど、なんせ学校生活はヒマ。

授業は楽勝すぎるし、給食はよく変なモノが出るし……（この前は
パイナップルと南瓜のごちやだき、なんてモノが出た）

まあ唯一、中休みと昼休みが楽しみなだけだ。

そんな小学校生活が当たり前だったのに…

あの日、全ての常識が遥か彼方の宇宙に吹っ飛んだ。

運命のXデー。

本当にそれは、突然やって来たんだ…

0 時間目・プロローグ（後書き）

皆様、こんにちは、リコラです。

いやあ何を思ったか急に学園モノが書きたくなりまして＜^．^；＞（↑オイ）

まあそんな気まぐれで出来たのですが、まめに更新していきたいと思えます！

ので評価・感想等、して頂けると嬉しいです。

朝の会・波乱の予感

キーン コーン カーン コーン…

カーン コーン キーン コーン…

清々しい春の陽気が帝丹小学校を包み込む朝。
チャイムの音も一層よく響く。

「はぁ……」

その校舎の教室の窓際の一角で溜息をつく少年がいた。

「また、今日も退屈な時間が始まるのか…」
当然ながらコナンである。

あらあら、と不意に後ろから声がした。

「そうやって理由をつけてまで授業中に寝ていたいのかしら？」

「バーロ、『いちたすいちはぁ?』『わかりませえん』なんて言っ
てるような奴と一緒に授業なんかしてられっかよ…」

ったく……

ガラッ

そんなコナンの不満をよそに、担任の小林先生が教室に入ってきた。

「起立！礼！」

「先生、おはようございます！」

と、元気な子供たちの声。

そして教室に再びざわめきが起こり始めた。

小林先生が、はい、静かにしてね、とパンパンと手を打つ。

「えっと…早速なんだけど、今日は大切なお話があります。」

大概それは、クラスの子の誕生日。

はあ…：…なんかもう、もっと新鮮なニュースがないのかねえ…

「実は今日、校長先生が結婚されて…」

そうそう、そんなホットなニュースを…

ってちよっと待て!?

「えゝえゝえゝえゝ！？」

なゝア!?

あの、タレ目の白ひげジーさんが?!

ありえねー!!!

全員の大ブーイングなどお構いなしで小林先生は話を続ける。

「相手は現役バリバリの女子高生で、何でも今日の午前中に式を挙げた後、直行で二人でイラクに新婚旅行に行くとか…」

——既に皆、ツッコむ氣力を失っていた。

あのジジィとピチピチの女の子の夫婦と言う事は、つまり……こんな感じ？

そしてコナンの妄想が始まる。

『はい、お口あゝんして♪』

『あゝん♪』

ぱくっ

『もうっ、相変わらずそのポ○デント、ムダに臭いわよクソジジィ♪』

『そおかねえ、このハート型のペアネックレスも悪趣味じゃのう、沢尻エ○カ並に性格悪い元ヤン♪』

『別に♪』

『ほうら素出た、素♪』

『黙れってーんだよ♪ウザいわよ♪』

ウフフフフ♪

ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ♪

ドガッ♪ ゴスッ♪

「……みたいな？」

ある種、コナンの想像（妄想）力に乾杯（完敗）である。

「でとにかく、副校長も式と新婚旅行に着いてってるので学校に居ないんです。」

コナンは思った。

絶対にそれは、女子高生の私物を奪って、萌え萌えコレクションに加える為だ、と。

「で、今日一日、代理の校長が来ますので！じゃ！」

「は？」

なんと、小林先生が逃げるように教室を出て行ってしまったのだ。あまりに急な事に、生徒たちは驚いていた。

授業は？

皆の頭がぐるぐると回っている中……

「はい、国語の先生、スタンバイお願いします!!」

職員室に入るなり、小林先生は大声を張り上げる。

その声に一人の人物が反応して立ち上がり小林先生とハイタッチを交わすと、颯爽と出て行った。

その小林先生の顔は、どこか憎めない——悪だくみを考えている顔だった。

皆、どんな反応するだろう？

そんな事を考えていたという事は勿論、まだ生徒達は知らない。

休み時間1・談笑もまた青春

「どういうことだ……?」

おかしい。

だってさ…

まず、こんな急な展開アリですか？

校長がムチムチ女子高生と結婚して、直行でイラク行き。
さらに副校長もそれについて行ってしまった、と……

「有り得ねーだろーがアー!!」

ひたすら叫びまくるコナンに、哀は

「私たちも遂に痴呆になったのかしら」

と、穏やかではない一言を呟いた。

教室もざわざわ、ざわざわといつにも増して賑やかだ。

少年探偵団の元太、歩美、光彦も、各々騒ぎ立てながら

「小林先生、どうしたんだろ?」

とか、

「授業が始まってからもう十分も経ちますよ…」

とか

「オレ、昨日かあちゃんと子供産んでよオ」

とか………

ってオイ!

「ちょっと待てええ!？」

コナンのツツコミが炸裂する。

「いや、お前何やったって!？ ヤバイだろ!？ ちょっとそれはまだ小学生は…」

「普通だろ」

元太が当然といったように返す。

「何が!？ 何処の世界の常識!？ ってかお前共々、かーさん大丈夫か?! 頭イっちゃってます!？」

「かあちゃん? オウ! 元気だぜ! 今日もゴミやったら喜んでよー」

「赤ちゃんに何食わしてるんだテメーはア!？ しかもオレが聞いてんのはオメーのかーさんのこと……」

「はぁ? 何言ってるんだ、コナン? オレもさっきから『かあちゃん』のことを……」

……………

沈黙。

「元太君、それは言い方が間違ってますよ!」

光彦の言葉に、歩美も頷く。

「そうよ、元太君！それを言うなら『昨日カラスが子供を産んででしょ？』」

あははははは……

完全に馬鹿扱いされる元太。

そして、歩美や光彦でさえ分かることなのに……

「何でオレが分からねーんだア！」

その横で、クールに溜息をつく哀。

「集団性のアルツハイマー……特殊例ね……皆、今日はテンションが高いわ……」

ガラッ

そして、先生らしき人物の影が、扉を開けた。

「はぁアアアアアアアアア！？」

が、その瞬間、コナン達は叫ばずにはいられなくなった。

1時間目・男は黙って浪漫を語れ（前書き）

更新遅れてホントにすみませんでした……

そして、待っててくださった読者の皆様、本当にありがとうございます！

1時間目・男は黙って浪漫を語れ

そこに居たのは、きちんとスーツを着こなした……小五郎であった。「あー、オホン！名探偵の、毛利小五郎です。今回、一日校長のお願いでと、く、べ、つ、に！君達に国語を教えることになった！」いつになく真剣そのものの小五郎。

…というか、反応がゼロなので、空回りしているだけだが。もう突っ込むべき箇所が多すぎて、コナンを含めた皆は、どこから突っ込めばいいのやら、もう全然分からないのだ。

まず、目の前の代理の『センセイ』は何者なのか？

コナン達からすれば、教員免許は！？

そして、何故に国語？！

それ以前に、どうしておっちゃん！？

「灰原……これ、夢だよな、絶対」

コナンの言葉に哀も頷く。

「ええ…悪夢ね。きつと。今ここで起こってることも全て悪夢ね。

…疲れてるのかしら、私達」

「ああ。多分、日頃から非現実的な日常を送っているから、こんな事に…」

現実逃避、という言葉をも身をもって知った二人であった。

ようやく周囲もざわめき始める。

「えー、で！お前らを見てると、文法の力がなくてねえ！そこで、今日はそれを踏まえた上で、お前らに、言葉というものを肌で感じてもらおう。」

凜とした覇気のある口調。

いつにない彼の真面目っぷりに、流石のコナンも動揺し始めた。

「その、テーマは…」

言うより早く、チョコレートを持つ右手が素早く動く。

カリカリ

ゴクリと皆も唾を飲み下した。

『テーマ・愛する人への告白』

……………

「工藤君…」

「大丈夫だ灰原、言いたいことはよく分かる。」

うんうんと腕を組みながら頷く。

「お疲れだな、オレ達」

静まり返った教室に、小五郎の声だけが響き渡る。

「いいか、自分の気持ちのありのままを綴れ！綺麗で美しく、かつ大胆に！そして…」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべて言った。

「この場で告白しろ！」

「どこでそういう思考回路が繋がるんだ！？」

ようやく少し気力回復したコナンがすかさず突っ込む。

「うるせえ！オレが宇宙の支配者だからいいんだ！」

「何でそうなる！？」

「それがオレのやり方だ」

「何処いずこの世界！？」

そうこうしている内に、小五郎は遂に大胆な行動を取った。
哀をむんずと掴みあげたかと思うと、そのまま黒板の前へと連れて
行ったのだ。

じたばたと抵抗するもむなしく、小五郎は哀を離さない。

お、おっちゃん…今度は何をするつもりだ!?

コナンが思うより早く、教卓の中から小五郎が取り出したのは、な
んと―バズーカと拳銃だった。
教卓の上にバズーカをセットすると…

ジャキ

黒くて冷たい銃口が哀の頭に当てられる。

「そしてこれも―オレのやり方だ」

……???

は?

「いーか? コイツのことを好きな奴は、今すぐ此処に来て告れ! さ
もないと…えー…なんだったけ…つと…:…んーと…」

「助けて、工藤君!!」

コナンは頭を抱えて机に突っ伏した。

誰かこの状況を夢だと言ってくれええええ!!

ってか、何ですか、この状況?!
有り得ねええええええ!!??

「は、はい! 僕、行きます!」

声の主は光彦だった。

全員の視線を一身に受けて、光彦は深呼吸する。

緊張が高まる。

「あの、ぼぼぼぼ僕はっ! は、灰原さん…」
ドォン!

光彦が言うや否や、バズーカが発砲された。

「きゃああああああ!」

「うおわつつつつあっ!」

クラスの皆の悲鳴がこだまする。

バズーカから放たれたのは、実弾ではなく……毛虫だった。

毛虫の大群の中でピクピクと痙攣する光彦を見て、小五郎が呟いた。

「男なら堂々と言えよな、ったく……」

その状況を見て、コナンは思った。

これはもう—自分のレベルを超えている。

手に負えない。

だけど、オレは灰原を……

「ちょ、ちょっと待って! 指名させて!」

「ええ!?!」

全員が一斉に哀を見た。

「江戸川君よ！」

—？

はい？え？

「…………オレだとオオオ！？」

「だからそう言ってんでしょ！？あなたしか居ないのよ！」

「だ、だからって」

「私の無残な死に見たいの！？」

「嫌に決まってんだろ！？」

灰原に目の前で、死なれたく…なんか…

「分かった。オレが行く」

そう言って悠然と、灰原の元へ歩いていった。

すう、と息を吸い込む。

「オレは、お前のことが世界中の誰よりきつと…………大好きだ」

バン！バン！

えええええ？そ、そんな…

目の前が暗くなる。

「のりぴーの歌のタイトルをパクるんじゃないよ！」

の、のりぴー！？まさか…

♪世界中の誰よりきつと 熱い夢見てたから
目覚めて初めて気づく つのる想いに……

嘘だろオ! そんな理由!?

そんなことを考えながら、コナンは鼻をつまんだ。
バズーカからコナンに発射されたのは、カメモシであった。

「工藤君……ダサイわ」

「誰のせいだと思ってんだああ!」

——くそ……

どうすりゃいい……

「あ、はい! 次、歩美がいきます!」

あ、歩美ちゃん!? 待て、危な……

つてかちよつと待て!?

周りもお構い無しに哀の元へと、とことこと歩いていく。

「哀ちゃん、大好き!! 付き合ってください!!」

そう言って、にっこりと微笑む。

えっと、あの……歩美ちゃん?

もしかして、これ……って……レズ?

「よっしゃ、合格!!」

えゝゝえゝゝえゝゝえゝゝ!?

その言葉と同時に、ピューと拳銃……否、水鉄砲から水が飛び出た。

「いやあ、やっぱり今はレズの時代だな！ナーハッハッハッ！！」
「…もう、嫌…」

コナンがそんなあきらめの言葉を吐いていた、

―丁度その頃。

教室を職員室から眺める、二つの影。

「全ては、計画通りね」

「ああ…これで俺たちの長年の悲願が…」

遂に……

―叶う。

休み時間2・現実から目を逸らすな

小五郎が「やべっ、そろそろヨーコちゃんのテレビが!!」とかなんとなく言って教室を後にしたのは、それからすぐだった。

ようやく教室に活気が戻り始め、光彦が毛虫地獄から這い出す頃には、コナン達は既に様々な推理を巡らせていた。

「一体全体、どうなっちまったってんだ？ おっちゃんが授業をするなんて…」

おまけに、授業というか完全に変な方向の世界だし。

「……一日校長が、何か関係しているのかしら？」

「その可能性は高えな。よし、職員室に行くか！」

というわけで、二人で職員室に向かうことになった。

その後ろには、いつの間にかやら少年探偵団も付いて来ているのだが。

「光彦君、大丈夫？」

歩美が心配そうに声を掛ける。

「あ、はい！ だ、大丈夫ですっ、僕は！」

「光彦、なんでそんなに顔が赤えーんだ？」

この手のことにはオクテなコナンが聞いた。

「あ、ほんとだ！ 光彦君、どうしたの？」

「光彦、おい！ も、もしかして、歩美……」

元太の言葉は急に途切れた。

「ん？ どうした、元太？」

「あ、あれ……」

指差す方向には、職員室がある。

そしてその入口に……マシンガンと防弾チョッキで完全武装した男達が立っていたのだ。

「なっ……!!」

「ええええええええええええ!!」

コナン達が絶叫する中、哀だけは違う反応を見せていた。

「この……感じは……」

哀の双眸が怯えで大きく見開かれる。

……まさか……

………彼ら……?

ガラッ

不意に、職員室から人が現れた。

「おお、哀君! みんなも! ホレ、もうすぐ授業じゃぞ!! ……ワシの」

それは、紛れも無い阿笠博士その人だった。

「……………此処は何処だ……」

どっかの軍隊の基地？

異次元ワールド？

そう考えた方が、幾分か楽だ。

取り敢えず、現実を捨てたくなってきたコナンであった。

2時間目・人生何があるか分からないから面白い

キンコーン キンコーン

「えー…天才発明家の、阿笠じゃ!」

しーん…………

まず、このジジイは誰だ?! と思っている子供の方が圧倒的に多かった。

そして、コイツは一体何をやらかす気だ!?! とも思っていた。

「博士なら、やっぱり理科を教えるのかしら?」

哀が呟く。

その横でコナンも、

「ああ……せめてそうであってほしいな」

と、半ば放心状態で返していた。

「では皆さん!! 君達には今から、社会についてを学んでもらうぞお!!」

得意満面の顔でそう宣言すると、博士は何やら懐からリモコンらしき物を取り出し、

ピッ

ボタンを押した。

と、次の瞬間…………

ゴゴゴゴゴゴ…ゴゴゴ…!

地響きでもしたかのような大きな振動がコナン達を襲った。

「うわあああああつ！」

グラグラと揺れながら、コナンは耳がキーンとなるのを感じていた。
ごくりと唾液を飲み込む。

嫌な感じがする……

そう直感して窓際へと歩いていった。

……当たっていた。

1年B組の教室は既に校舎から遠く離れ、空へと飛び出していた。

へなへなとコナンはその場に座り込んでしまった。

「どうしたの？」

コナンに駆け寄った哀が見たのは、教室が飛んでいる、という現実だった。

「灰原……今日って授業、何時間？」

コナンが頭を抱えながら聞く。

「……四時間」

「そうか、この地獄があと二時間続くってか」

何かもう、泣きたい。

ただひたすらに泣き叫んで、平○堅の「瞳を閉じて」を世界の中心で愛を叫びながら歌ってやるうううううううっ……！！

「皆、外を見ようか！絶景じゃぞー！ー！ーい♪」
なんて博士のKY発言で皆は外を見て、皆も泣き叫んだ。

「びえええええん、まゝあまゝあゝゝっ！！！」

「おうちにかえりたいよおおおっおおおっ！！」

この現実を受け入れるだけの精神容量を、誰も持つては居なかった。

メンタルキャパシティー

「博士……とりあえず何が目的なんだ？」

耐え切れずにコナンが切り出した。

「いやあー！！ワシの平和的かつ安全で素晴らしい発明が一日校長に認められてのオー！」

そういつて、足元から重そうなボストンバッグを取り出した。

「お金もたーっぷり貰ったのお！これで暫く借金取りに追われずにすむぞーい♪」

「借金取りって！？オレ初めて聞いたぞ！？」

「なんじゃ新一、知らなかったのか？ホレ、ワシの家に午前2時、虹の架かった日にだけ現れる、幻の……」

「知るかアアアアアアア！！？」

ああもう、どうすりゃいいんだっ！！

両手を堅く握り締めながら、コナンは考えた。

考えて考えて考えて……飛んで飛んで飛んで……ってアレ！？
気が付くと、教室はかなり酸素濃度がキツくなっていた。

まずい!!

このままだと……皆オダブツだっ!!
ってあれ、この台詞、前にも言ったことなかったっけ?

その時。

コナンはようやく閃いた。

腕時計型麻醉銃!

思いついたや否や、コナンはすばやく博士めがけて麻醉針を打ち込んだ。

ドサッ

「……自分の作ったものによって破滅した科学者……興味深いわね……
何を冷静に自己分析してるんだ!!」

ドド…ドドドドドド…!!

と、急に、教室が動きを止めた。

「ホラ、コナン君、お得意のアレが来ましたよ!」
光彦がそっと囁く。

「?なんだよ」

「コナン君、よくこういうときに『あれれ』って……」

ご…ゴオオオオオオオオっ!!

急に、教室がグラリと傾いた。

……はい、皆さんと一緒に？

「あれれれれれれ
　　ゝゝゝ？
」

そのまま、教室は真つ逆さまに落ちていった……

「全く。貴方のやり方は無茶苦茶だ」

窓際に、二人の男が立っている。

一人は、先ほど口を開いた男。

そしてもう一人は、白髪交じりの黒髪の威厳のある男――そう、一日校長である。

「あんなやり方で、本当に計画が成就すると思いますか？」

男は、冷笑するように言った。

「彼を侮っちゃいけませんよ?……一日校長さん」

「分かっているさ。だから、君を呼んだんだ」

低く威圧するかのような声。

その言葉を聞いて、男は含み笑いを漏らした。

「……裏があることくらい、私は知っていますからね？」

2時間目・人生何があるか分からないから面白い（後書き）

ああ、読者の皆様、大変お待たせいたしました。
リコラです。

ほんとに長い間お待たせしました……

さてさて、次回予告なのですが、これはもうずっと温存していたネタです。

まさかのアイツが帰ってきます！

休み時間3・気にするな、人生とはそんなものだ

「……ふう。ギリギリセーフだな」

冷や汗をかきながらコナンが使っていたのは……アドバルーン大にまで膨らんだサッカーボールだった。

粉々に粉砕した教室を横に見据え、コナンはアドバルーンサッカーボールにしがみついた子供たちを、一人ひとり救助していた。

「あ、ありがとう、コナン君」

「助かりました……」

取り敢えず、皆は無事だな……

そう安堵したコナンは、哀にアイコンタクトをとると、速やかにこの学校から逃げるようにと指示を出し、博士のもとに駆け寄った。

「博士、博士?! しっかりしろ!!」

幸いにも、柔らかいお腹から着地していたため、ダメージはほぼゼロだった。

―贅肉はつけておくもんだな……

「う……新一君……? し、新一!!」

「気付くの遅えわあああああつっ!!」

瞬間、博士の顔面に蹴りをかます。

「博士、一体どうなってんだ！何でこんなことになってんだよ！？」

「じ、実はの……」

博士が何かを言いかけようとした刹那、急に耳障りな音が響いてきた。

この音は……パトカーのサイレン！？

ナイス！！

誰が呼んだかは知らないーが、ナイス！！

そう思った矢先、パトカーから出て来たのは……

「佐藤刑事!!!？」

「あ、コナン君！大変なのよ……実は」

佐藤刑事がパトカーから出てくるや否や、耳元で手短に説明する。

[illegible]

それは、やっぱり常識という常識を粉々に粉碎していった。

休み時間3・気にするな、人生とはそんなものだ（後書き）

ええっと……長らくお待たせいたしました、リコラです。

本当にすみません……

ええっと、それですね、これからどうなるんでしょうか？というところなんですが……

多分、一番はっちゃけて書いたんで、有り得ない話になってます。はい。

今のうちに言っときますね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0176e/>

ある日の帝丹小学校

2010年10月12日03時07分発行